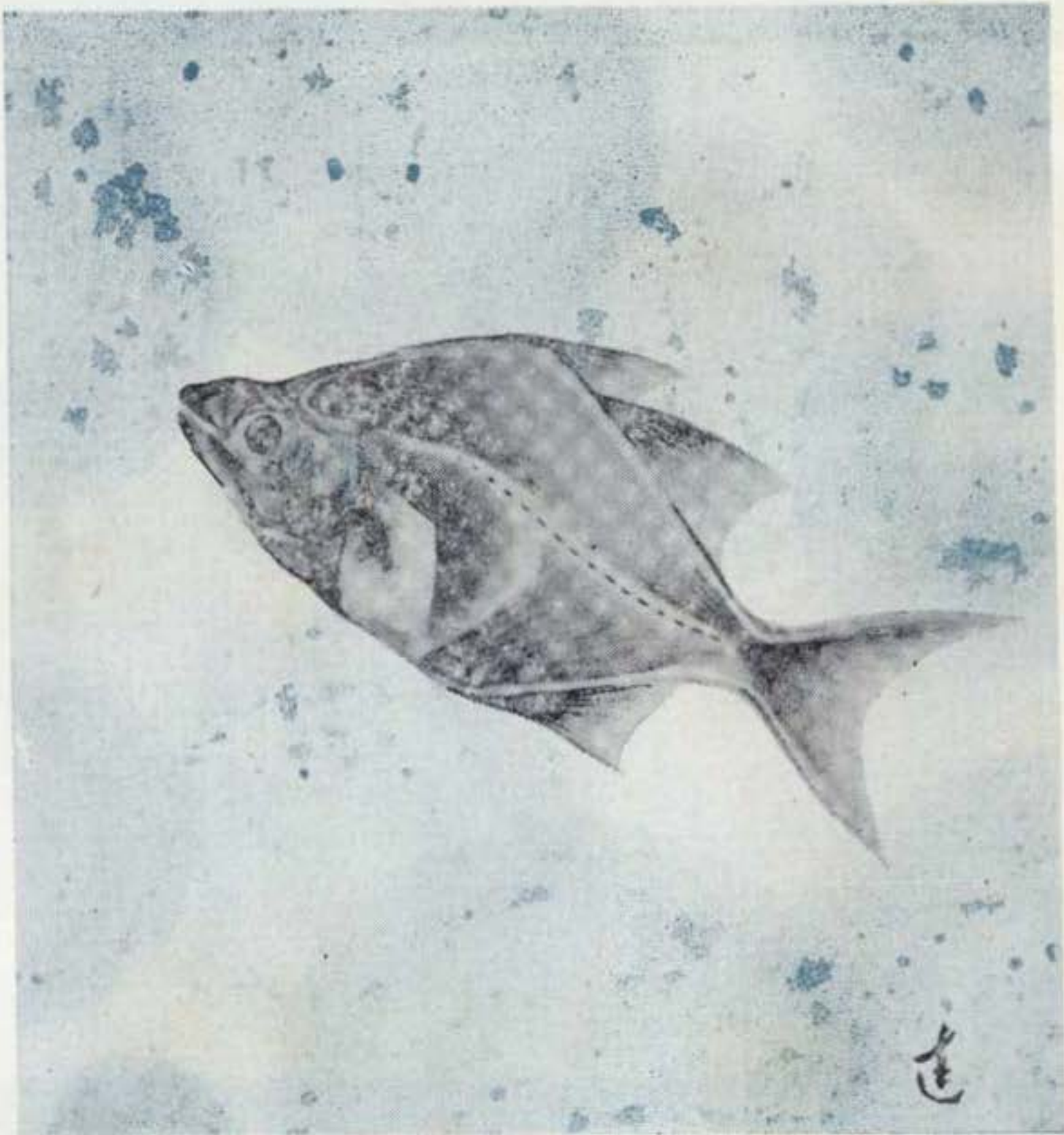


# 浄土

八月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）  
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）  
昭和四十五年七月二十五日印刷 昭和四十五年八月一日発行

第三十六卷

第八号



## 目次

表紙「グラス フィッシュ」松涛達文画

|                          |           |      |
|--------------------------|-----------|------|
| 法然上人の念仏のおかげで.....        | 磯部常治..... | (2)  |
| インドの旅日記①.....            | 佐藤治子..... | (7)  |
| 女性と修養.....               | 藤沢徹照..... | (12) |
| 聖典解説⑦『往生礼讃』より 日没無常偈..... | 戸松啓真..... | (16) |
| 大師のおやま(下) 一霊峯・高野山ー.....  | 増田任雄..... | (19) |
| 綾子の家出(中).....            | 吉野翠幹..... | (22) |
| 在家読者よりの提言.....           |           | (26) |
| 道④ 京都への道.....            | 高橋良和..... | (27) |
| 宝物シリーズ⑧ 中世末期の寄進状.....    |           | (32) |





## 今月のことば

未来学は科学的基礎の上に立って着々とその成果をあげている。科学技術の発達には実に目をみはるものがある。今後二十年五十年先の社会は、その構造に於いても、機能に於いても全く想像に絶するものがあるだろう。

今日の一年は実に昔日の百年に相当するものがある。このように社会の変革にともなうて人間の意識革命も漸次であろうが、変化して行くものと思われる。その意識はどの方向にのびてゆくであろうか。組織工学から脱工業社会ともなれば、経済活動は現在の社会に於けるような主地位を失ってゆくことが考えられる。そこで情報社会がますます浮びあがってくるであろう。情報のはんらんが人間の意識をにこったものにしてしまうであろう。人間そのものの危機があると思う。ここで法然上人の選択本願の意義が生きてくる。本願は生ける人間の意志に通ずるものである。宇宙の根源的な意志が法然上人に於いては如来の本願としてうけとられるのである。仏教という老大な情報のなかで本願をえらび出し賜うた上人の炯眼に頭をさげるものである。人間は何のために生き、どのように生きて行くべきであろうか。これが人類の不変の課題である。そしてそれを指示し賜うたのが上人である。

未来社会に生きる人間にとって最も問題とされるのは宗教であろう。現在に於いて、呪術的、占的宗教がかなり広く行われているのは、未来社会の宗教の「はしり」のようなもので、仏教が邪道としたこれらのものはやがてすがたをけし正しい仏教がすがたをあらわすであろう。未来社会に於いては宗教がその主地位を得ることは明かである。即ち人間の社会が甦がえるであろう。選集本願の法然上人の宗教はその正しい地位を得ることでありましよう。

(佐藤良智)

# 磯 部 常 治

= 弁護士・東京銀座在住 =

## 法然上人の念仏のおかげで

△はじめに▽

私の実家は祖先伝来浄土宗で、父林三郎は大工職造船業を営み、聖徳太子を奉讃し、信仰が厚かった。こうした関係から、日夜浄土勤行のおつとめの時などは、必ず私をそばにおき、仏前に合掌、漢文の御経文を口伝で読まされ、時々南無阿弥陀仏と唱えさせられた。その中でも私が五才頃から、略懺偈の、

我昔所造諸悪業

皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生

一切我今皆懺悔

と唱えて頭を畳にすりつけ、お十念させられたことなどは、今なお忘れ得ぬ記憶で、私の念仏の唱えはじめであった。

このようなことが十二三才頃まで続いたが、三十才で弁護士の業務につき妻帯して、四苦八苦の家庭生活にはいりました。四十五才頃までは経文や念仏を唱えても、それがどういう意義なのか、別に関心は持たず、またその唱えることが、どうして人間生活に必要なのか、ためになるのか、僧侶は、信者はその意義が判っているのか、木魚や柏子木の形式だけの儀式にすぎぬのか、まったく不可解のままに過ぎて来たのであった。

△法の探求▽

ところが弁護士となって、この業務十数年間、民事・刑事の人間同士の生きた係争事件を、法律に

よって裁判にかけ、判決により解決せんとする仕事の中には、法律による裁判では、本当の解決にならない場合が多くでてくるのに気づくようになった。例えば民事の裁判で、被告は原告に金員を支払えとの判決があっても、被告が行方不明とか無財産のときは原告は判決通りの金も取れず空に帰してしまう。また刑事で、罪人の被告に懲役何年間行けと言渡され、その刑の執行を受けたとしても、出獄後は前科者だとして社会には容れられず、生きんがために、また再犯、遂には強盗、一生を牢獄に終るという人など作ってしまうという、全く痛嘆堪えぬ事件に遭遇するのであった。

そこで私は法律による裁判では人間生活は本当に全うされぬ。法律の効果あらしめるにはどうしても、法の意義・本質を究明して、その法力によることが必要だと痛感し、法律哲学を勉強すると、更に仏法における法とは何ぞやの探求の必要に迫られた。

そこで私は昭和十五年頃、即ち日支事変の頃、宗派を問わず有名な寺院の御法主方を訪問し、「法とは何ぞや」と御教示願ひ回った。ところがその殆んどは、一向に私の質問を取り上げてくれる者はなく、門前払いの憂き目にあった。私は人間の倫理道德の道を解き教える者は僧侶であると信じていたのに、この説法を拒否するような僧侶の寺院では、人間の道義は頽廃する筈だ、理屈や形式論での法律社会は死律化していくのも無理からぬと、自問自答しながら独りなげき、芝公園の増上寺に辿りついたのであった。

そこで私は最後に、この寺の法主はどうかと門戸を叩いた。すると先ず通れと私は応接間に案内された。この当時の増上寺は戦災前の寺で荘厳にして、さすが法然上人の念仏寺の本山らしい尊厳さがあった。

私は円卓の椅子にかけ、何びとが現われるか、最後の問答を試みんと待ち構えた。すると間もなく六十才位の老僧が珠数を片手に小僧をしたがえ、私の前の椅子に座を占められた。合掌の後、「御用



件は」と、いと淑かに、私はすかさず「法とは何ぞや」と質問した。すると「法とは生きることだ」と答えられた。私が直ぐ「生きるには」と質問したら、「生かすことだ」、何をと問うと、「人を物をことを」と、いと謹言に答えられ、順々と説法されるのであった。

その偉容、これがお釈迦さまか阿弥陀さまかと思われた。お説法は約二十分にして、なお不可解のことあらば、毎週日曜日の日曜講演に來られよ、とのお諭しであった。

私はまったく感激そのもの、返す言葉もなく、ただ感謝の辞を述べて退陣、山門へと足を運ばせた。しかし「この坊主ちよつと話せるな、今までの坊主などとは違うよ。そして師とするに足る。よし日曜講演で」とは、腹の中での独りごとであった。それから私は毎日曜ごとに仏法の説教聴聞に通い、あるいはノートしては仏法の勉強をし、少しでも大僧正のご高德を受取ることにつとめた。

かくして年を重ねるうちに、増上寺縁山会の会員に、また共生会の会員にと入会し、仏法の意義および道の御説法を聴聞し、浄土宗の経文や念仏が判ったり判らなかつたりの歳月を重ね、更に年毎に一回の授戒会、または五重相伝会に参加を許されて、仏法の御教えをお受けすること二十余年、そして今日に到る誠にありがたき極みである。

#### △仏教・仏法・念仏は和語で▽

その間、大僧正の伝法はすべて和語であつたから、無学の私にはよく人生生活と直結して、いかに仏法が役立つかを知ることができた。聞けば法然上人も、すでに浄土宗念仏仏教を『一紙小消息』として、『二枚起請文』として、無智のともがらにもよく悟り判るようにと伝法され、『南無阿弥陀仏』の一語をもつて、人間生死の道を生き生かされることを、何びとにも判りよくご説法されるなど、全くありがたき極みである。

私などは漢文仏教ではとても、とてもその意義を理解することはできなかったのであるが、その仏

法を更に椎尾大僧正は、お授戒会に五重相伝会に縁山会に共生会に、老若男女に判りよく、和語をもつてご説法下されました。ことに、共生念仏の心髓につき、

大自然の総合力の上に乗って、どなたも生活している。金の有無、命の長短、病気の有無なども皆、大自然の生活である。そういうものをまとめてみると、無論限りなくあるが、それを阿弥陀仏というのであって、大自然の生活を信じて、その仲間の一員として生活していく人が、阿弥陀仏と一つになった人である。しかし、その大生活の中に入りたいという心がなければ、その人は一人立ちであり、阿弥陀仏の外にいることになる。そして、南無阿弥陀仏と唱えた時、その時から初めて大自然の生活の中に入るのであり、このことを簡単に説いたのが阿弥陀経である。

との御説法は、まことによく判る阿弥陀経のお念仏である。これこそ和語による御説法の賜である。この説法こそ、今のゲバ棒青少年を導き得る念仏ではなからうか。

#### △仏教のお説法はすべて和語で▽

かくして私は仏法に帰依し、家庭に業務に実生活とつながりつけ込んで来たのであった。本当に椎尾大僧正の「法とは生き生かす」ことだ、念仏の心髓は「共生念仏だ」、それが阿弥陀経だと、和語でお諭し下さったお陰だと重ねて感謝せずにはいられない。

然らば、ほかの漢文経文の読めない青少年などを浄土念仏に帰依せしむるには、どうしても共生和語念仏でなくては説き得ないではないでしょうか。このことに気付かないで、増上寺の末寺がいつまでも漢音仏説三部経などを、さも有難そうに読経していても、聴聞する人は一向に聞きとる耳も眼もなく、しまいには今の寺僧とは絶縁してしまひ、布施も塔婆もなくなる時が来るではないかと私は案じられる。毎日大学生の多くと接触している私には？などと考えると、これからの浄土念仏は和語による共生念仏が最も説法しよいと思う。否これではなくてはダメだと強く反省を促すものである。



### △彼は吾なり▽

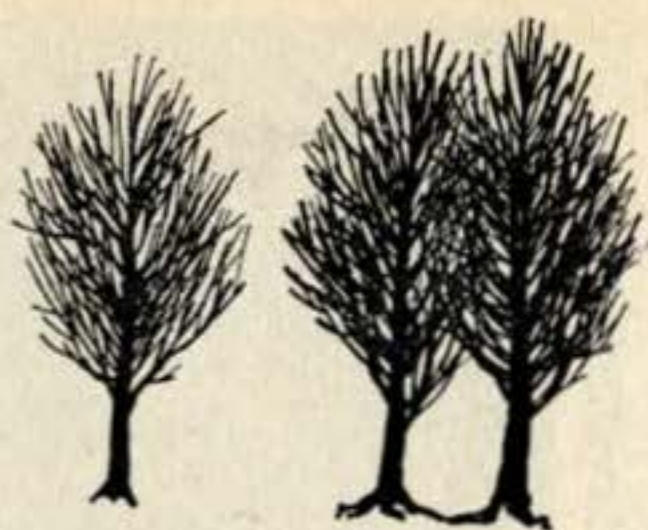
法とは生き生かすことだとすると、どうしても「共に」ということはなくてはならぬ要件である。それは「彼は吾なり」と思ひ行ふことが、本当に生き生かす道だと思ふ。私は「法とは生き生かすことだ」と身に意を説くことによって、生きられると強くいいたい。

実は私は昭和二十五年以降約十年間、法務省人権擁護委員を務めた。その間二十三年一月二十六日、池袋の帝国銀行椎名町支店で十二人の行員を毒殺したという平沢貞通の死刑判決は人違いで、平沢氏は犯人ではない、無罪とすべきだという再審事件を弁護することになった。この件につき、私は昭和二十六年平沢氏の懇請により、同氏に面会し仔細事実を聴取するに犯人とは思えない。それなら他に真犯人がいる筈だ。また判決にミスがなくてはならぬと探求すると、真犯人といい得るの証拠は出たが、すでに死亡（自殺の疑い）している。次に裁判のミスはこれも次から次へと出てきたが、この再審裁判は棄却々と葬られてしまい、死刑の判決は確定してしまったので、今は死刑を無期にして欲しいと、恩赦の申請審理中である。

しかし、どの法務大臣も死刑執行はできかね、平沢は七十九才で、今仙台に未決囚として在監中だが、とに角私は、この件を法務省人権擁護委員として弁護人となり、約十数年間弁護につとめて無罪の証拠を数多く探求し得て、二十年間の死刑執行を免れ得た今日あるのは、私が「彼は吾なり」と考へ、もし私が平沢氏であつたならと思ふ時、私は氣の毒でならず、何とかして眞実を眞実として、彼を生かすことこそ、法即ち共生念仏の心髓を奉仰する所以だと、今日までその仕事に働き励むことができたのだと、念仏のありがたさに感謝している次第である。

今後もお共に健在で、眞実に生かし生き抜かんと、念仏する次第である。

謹んでお十念合掌する



佐藤 治子

(第一回)

## インドでの旅日記

インド仏蹟参拝団は、二月十五日お涅槃の日にブッタガヤを参拝すべく、旅程を組み、次々に出発して行く。私も参加することにきまつたグループは、二月十三日出発することになった。

インドは暑い国。水はのまぬ方がよい。食物は辛い。等々をきかされていた私は、心して準備したものは、次のようなものであった。特にソヴェートにて役立った品物等は仕度する物のメモ帳にかき入れた。

湯わかし、プラスチック製のびん(登山用の物)・固型燃料(大きいのは不便)百円のを五個・料理につかう銀色(アルミ製)の包み紙・梅干・一回づつのめるように紙袋に

入っている緑茶とホーシ茶(水の不自由な所なら普通のお茶では急須を洗うのに余分のお湯を必要とするため、インスタント式の紙袋入りのがよいと考えてのこと)・タオル・ハナ紙・アルコール綿・(二個の容器に入れた)・ワッシユエンドドライ(インスタント手つきのようなもの)二箱・蚊よけのぬり薬・蚊とり線香・ビタミン剤・下痢止め・熱の出た時の非常用の錠剤・なお今回は日除け帽子・サングラス・マスク(これは特にエージェントよりの注意によるもの)・夜は冷えるというのでスエーター・靴をぬいで寺院を参拝するというのでソックス・割箸(これは大役だちをした)・ストロー(これは必要である。私はビニール袋に入れておきながら忘

れて困った）・夏服（二月半ばより三月九日まで、日本では雪が降ったという頃であるのに）

以上である。

× × × ×

二月十三日。羽田出発の時、空港内にて参拝団の結成式を行なう。阿川貫達先生が発熱のため参加中止となり、奥様もとりやめられたのは誠に残念であった。十人で一グループと



Ⅱ回教の祭りでにぎわうカルカッタの町Ⅱ

して、エージェントの女の人が付添うことになっていたが、結局八人になってしまった。あんなに熱望されていた先生御夫妻の中止は淋しい。大勢の方々に見送られてルフトハンザに塔乗、二時四十五分出発。羽田上空を大きく旋回して、一路南へと向け飛ぶ。富士山が見える。

三時間たった時、時計の針を一時間戻す。ホンコン着六時。夕食後BOACに乗りかえ、夜景の美しいホンコンを出発、一路カルカッタへ。

「只今ヴェトナムの上空を通過しています」とアナウンスがあり、何となく身がしまる感じである。再び時計を二時間半戻す。カルカッタ着、現地時間午後十一時三十五分。地上に降り立つと、モヤーとしてなまあたかな空気を感ずる。

「シン」というターバンをまいた、シーク族のガイドさんが出迎えに来ていた。この人はインドを離れるまで付添ってくれ、日本語の上手なこと、おどろくばかりであった。同行の中で、特に専門家の持つような写真機をもたれた二人の方は別室へ案内されたが、登録されただけということで、我々は心配していたこともなく、税関を通り抜けバスへ乗った。

真夜中のこととて何も見えないが、郊外らしい道を市中へとバスは向う。足がかゆい。あつ、蚊だ！ バスに蚊が待機

していて、外国人の私たち、特にスカートををはいている女の人達の足をチクリチクリとさす。バスの窓より入る風もなまあたたかい。

市中に入ると、布にくるまって道路のわきにゴロゴロ人がねている。牛がのっそり現われた。ホテルへ着いたのは午前一時。やせたはだしのボーター達が次々と荷物を運んで行く。とにかく早く横になりたい。部屋へ入って、すぐ天井につけてある扇風機を廻した。急に汗が出始めた。ザンブリコとお風呂につかり、ジトツとした汗ばんだ身体を洗う。

長い飛行旅行だった。二月の極寒の日本から、急に暑い国へ来たこととて身体がなれていない。ベットに横になったものの仲々ねつけない。寝苦しい夜であった。

二月十四日。六時起床、むし暑いので廊下へ出てみた。どの部屋も外に面して回廊式になっているので、外気にふれたかったのだ。柱の向うからベアラ（ボーイのこと）が私をみつめてやって来た。チップのことがすぐに頭にくる。急ぎ部屋へ戻ると、もう私の後に立っていて、靴をみがこうとか、何かと用をしようとする。まだよいといっても仲々出て行かない。「又後で貴方にたのむ」といって出てもらつた。

パキスタンでおぼえたことだけれど、ベアラにも階級があ

る。インドへ来る時も注意されたものだった。靴をはいているのは上位。そして部屋付きのボーイも靴をはいている。下のベアラ達ははだし族である。上のボーイに一ルピー（日本金では四十八円）、ベアラはその半分位やればよいとのことである。食堂から戻って来ると飛んで来て、鍵をとって戸をあけてくれる。これ又チップ。さっき断ったベアラが入って来て靴をみがこうという。旅行中チップをほしくてつきまとうベアラ達には閉口した。皆同じような顔に見えるので、どの人だったか忘れてしまふし、私のチップノイローゼはカルカタから起ったようなものである。ロビーへ行く通路にはみやげ物屋の店が並んでいる。店の前に立っている人達は「マダム何卒」と案内しようとする。仲々しつこい。二晩泊ったこのホテルでは、店の関所を通らないと部屋に戻れない。私は用あり気に、サッサッと足早に通りぬけることにした。

午後からバスで市内見物に出かけた。

国立博物館へ。ガイドさんが入場券をまとめて買っている間、ノソリノソリ歩いていた牛の写真をとりたいたいと思つて、二三步外へ出てみたが向うをむいている。これから何度も見ることだろうけど、街中を悠々と歩いている牛の写真第一号

はあきらめてしまった。シンさんから「持物はしっかりもって、一緒に見学して下さい、バラバラにならぬように」と注意を受け、博物館の中に入る。

入口正面のアショカ王の獅子頭に、皆すい寄せられたように近づいていく。次の間にかざられてある玉垣（ランジュン）は有名なバルフートのものという。グループの人達は「ああ、これだ」と、つかれたように立ち、そっとさわったり、感に入ってしまった。写真でみたり、本でよんだりしていたものを、今現実に見たのだ。感慨にふけるのも当然である。私はそれよりガンダーラの仏様の御顔にひきよせられる。日本で「アアガンダーラ仏！」といっ



＝ヤシの実の汁を一気にのみほす＝

て拝んだ感じと異なる何かがある。マトウーラとかガンダーラとかの本場、インドへ着い

た、その日にこれらの仏頭に接し得た満足感！あの胸のふくらむ自己満足を、今ここでもって強く味い得たのだ。思い思いにちらばって、展示されているものに足をむけていく。

さて、博物館を出て、ジャイナ教寺院へと向う。途中のバスの通った町は、丁度回教のおまつりというので、店頭に品物を一杯並べているし、ワイワイと人通りも多くにぎやかである。総領事館より、日本人の旅行者は夜は外へ出ぬようにと注意があったそうだが、昼間の人ごみの市中は、何の不安もなく、バスへ乗っている私達も珍らしそうに雑踏を眺めていれば、むこうの人達も珍らしそうにつっ立ってこちらをみている。珍らしい茎のようなものを束にして頭へのせている男の人を何人か車窓よりみた。さとうきびなのだそう。さとうきびときいて、この実物をみて急ぎ写真をとる。

× × × × ×

ジャイナ教寺院へ着く。トルコ石のような青色の建築物。実に美しい。カルカッタは東インドの中心であり、国際空港は東部でのインドへの入口であり、又出口でもある。最初にインドへ足をふみ入れた、ここカルカッタで、二千五百年前に仏教と一緒に起った宗教であるジャイナ教の寺院へ、靴をぬいで参拝するのも初めてである。中の仲々高価なガラスな

どの莊嚴さに目をみはってしまふ。

街の中の豪華な寺院の印象を残して、そこを出た私は、近くのどこからかジャンジャン鳴物のさわがしい音にひかれて行ってみた。ヒンドウの寺院で信者がおまつりをしているとのこと。こういう所をみたかった。ガイドさんは「バスへ何卒」といって、そこへ案内してくれない。こういう所こそ見学したいのに！

ヴィクトリア女王記念館へ行く。英国の植民地時代に造られた記念館は、池の向うに真白く近り難い威厳をもって静もりかえっている。池のベンチに若い男女が肩すりよせてこしかけている。池にうつる建物の美しさに、暫らくみとれる。

バスが停っていると、外国人の旅行者とみて、へび使いが商いをはじめ。何度も聞いてはいたが、みるのは初めて。一ルピー出すと蛇をおどらせるといふ。三人で三ルピー出した。笛をふいてコブラをおどらせてくれるのを、今か今かと待つ。バスから他の人も降りてくるし、近くの子供達も寄つて来る。仲々始まらない。蛇使い師のいうには、払わないで写真をとる人もいるので、コブラが気嫌を損じておどらないというのだ。三ルピー出した三人の私達は、もっとお金をせびるずるい蛇使いに愛想をつかし、バスへのつてしまった。

のどがかわいて仕方がない。ミンさんがバスを停め、ヤシの実を買つてのませてくれる。ヤシの実の口をサツと切り、そこへストローを入れて汁をのむ。水よりは安全という。けれどまずい。ヤシの実の汁をのんだのはこの一回だけ。

夕方近い町をホテルへ戻る。午前中休養をとったとはいふものの、二月の極寒の日本を忘れてしまふ暑いカルカッタの見学も、ホテルへ戻るとやはり疲れを覚える。ここの水は特に慣れない者には下痢を起させるとか。食堂で「熱いお湯を」と、おやかんを出してたのむ。インスタントの日本茶をもっている私にボーイ達は目をみはっている。お湯は残ると登山用のプラスチックのびんに入れる。朝、歯を洗う時にこれを使うために。このびんは大役立ちである。

明日はこの旅行の第一の目的である御法要をブッダガヤで勤める日。浄土宗の先発された方々もブッダガヤで会することになっている。五時半出発、そして飛行機で現地へ着くとすぐ着替えしなくてはならない。法要のための住職の衣や白衣等をカバンの一番上に入れ整理する。早くねなくてはと、ベットに入る。ごわごわのシーツ。これもインドではあたり前のことらしい。水のせいかも知れない。洗つてあるシーツ自体が、まずありがたいことなのである。(つづく)



# 女性と修養

藤 沢 徹 照

(埼玉県大宮市在住)

外国のことわざに、「家庭は人をつくる」というのがあるが、まことに家庭こそ、人生最初の大切な教育の場である。人の教育は、どんなに賢い人でも、その幼時においての道徳的環境からかならずつよい影響をうけるものである。実際、家庭ほど感化力の大きいものはないといってよい。学校教育でも、家庭の感化力が伴わないと、人格形成、即ち「人」をつくることはできない。もとより学校教育は尊重すべきであるが、一にも学校、二にも学校と、学校教育のみが教育の全部であるという偏重的な考え方は誤りであろう。

家庭の教育は主に行動から示されるものである。耳からはいる教授上の教訓がどんなに行き届いても、とても目からはいる実際教育ほどには人の心を動かすものではない。

日本は「障子の国」といわれるように、紙一重の障子で部屋を囲み、すこぶる開放的であるから、家族の行動がそのまま子供達のお手本になってしまう。その上、家庭生活におけるお手本は故意に示されるものではないから、その偽りのないところに、とりわけ子供を感化する力があることを忘れてはならない。スマイルスが、

「児童がその環境に似ることは、ちょうど虫の色がその食う葉の色に似るようである」といったのは、いかにも名言である。

ところが、子供のお手本は、始終子供の側を離れずにいる母親であらう。いつの時代でも、母は家

庭教育の中心であり、子供の最良の教育者でなければならぬ。デュージ・ハーバートは、

「一人の善良なる母は百人の教師にあたる」といつている。また、

「家庭は最良の教育所であり、母は最良の教育者である」

ともいつわれている。母たることは、まことに尊い女性の特権である。女性は、妻としてよりも、娘としてよりも、母として最も尊敬をかうるのである。遠くローマにおいても、母という言葉は尊敬の対象であつた。ゲーテが、

「女性の一番美しい時は、花嫁の厚化粧ではなく、若い母親が無心で子供と遊んでいるときである」といつた言葉はまことに味うべきことである。

かように、子供が母親の感化影響を受けることの大なることは、母が家庭にあつて、子供の教養の中心となつてゐることからして当然考えられるところである。ドイツの哲学者カントは、一鞍作りの子であつたが、その母の敬虔な信仰は、もっともよくその子に影響して、世界に稀な厳肅な道德学者たらしめたことは、有名な話である。また、インドの聖雄マハトマ・ガンジーにしても、近くは、アメリカのケネディー前大統領にしても、その母の崇高な信仰と、祈りと愛のおもひがあつたからであらう。

「揺籃を動かす手は、世界を動かす手である」

という諺があるが、幼時の保育からすすんで、高い教育をうけるに至るまで、母の責は重且つ大であり、それは、時代を超えて永遠なるものである。

むかしから、人格形成の面で、知、性、意の三方面があるといわれる。夏目漱石は、

「知に働けば角が立つ、情に棹させば流される。意志を通せば窮屈だ」

といつているが、いずれに偏しても完全な人格とはいいいえない。知性の聡明と、感情の豊かな高雅さ



と、意志の強固とは、人間形成に大切な条件である。

とくに女性にあつても、知的に自分をみがきあげることが、さらに必要なことは、情愛の修養、徳性の涵養であらう。人は感情の動物であるといわれているが、感情ほど人の行為につよく影響をあたえるものはない。それゆえに、感情を豊かに正しく養ふことのむずかしさと大切さをつくづくとおもうのである。殊に、女性は感情に富んでいて、すべての行為はみなこれに支配せられる傾向があるゆえに、一層これについて修養する必要がある。

知や情の作用は、割合外から内にうけることが多いが、意志の作用は、内の力を外に出し、外に実現することである。

「外よりは手もつけられぬ要害も、内より破る栗のいがかな」

といわれるように、栗のいがの強さ、しかし真の強さはいがでなくて、内にあるいがを破る力である。お互に、善悪をわきまえることができても悪を退け善を堅く守ることは、骨が折れるが常である。善いと思つたことは思い切つてやる、思い切つて試みても力がつきてしまうことが多い。しかし、それをはねかえしていくところに、意志力は養われていくのである。

このように、知、情、意の三方面を統合的に修養努力して、品性の向上を期することが、即ち徳性の涵養することが大切である。しかし、それは庭園に草花を造るようなものであつて、随分骨の折れる話である。草花を素直に育てるのには、弱いときには添木をしたり、雑草や害虫を取つてやったり、又水や肥料をやらねばならない。徳性の涵養には、先徳のおしえに耳を傾け、つねに反省熟慮することが大切である。

仏教は、一口にいつて、心の改造、魂の教養をおしえるものであるといふことができよう。維摩経の中に、自己改造、社会浄化への道を三十有余あげているが、そのはじめに主なもの三つあげてい

る。一に真面目になること（真心）二に信仰深くなること（深心）、三に情深くなること（大悲心）である。浄土宗では、至誠心、深心、回向発願心の三心をあげている。

いうまでもなく、スマイルスが「自助論」で、

「真実は品性の背景である」

といているが、人が世を処するにあたって、真心がなかったならば、ちょうど背景がない人のように、とても世の中に立つことはできない。

「人多き人の中にぞ人ぞなき、人となれん、人となせん」

という歌の心を、篤と味わいたいものである。

つぎに信仰を深くするとは、安心を得ることである。心の据りをこしらえることである。

仏教では五力ということ説くが、あるときは信仰となり、あるときは信念となり、あるときは信用ともなる。それは、云いかえると、ただ一つの誠ということもできよう。誠があれば、人に対しては信用となり、仏に対しては信仰となるのである。

「踏まれても、また咲きたんぼほの笑顔かな」

信仰の人は、どんなに苦しい試験に出あっても、長い間病床に臥しても、じっとしてその苦杯をなめることができる。信仰こそは、いかなる場合にも、心の平静と平安を与えるものである。

また、情深いこと、これは愛である。愛は人間を生かす力であろう。真の愛、純な愛、一点の私心をはさまず、利慾の念をすてて真心から子供を愛する母の愛は、仏の慈悲に通じ、仏心とも通ずるものである。

み仏（阿弥陀仏）の御名をよび、常に心に仏を憶い、仏の心を心として、大慈悲を外に実現してゆくことが、念仏信者のふむべきめじるしである。

戸松啓真

(大正大学教授)

沙門善導  
集記

『往生礼讃』より

# 日没無常偈

諸衆よ 聴きたまえ 日没無常の偈を説かん

人間そうそうとして衆務を営む

年命の日夜に去ることを覚らず

燈の風の中に滅えなんこと期し難きが如し

忙忙たる六道 定趣なし

いまだ解脱して苦海を出ずることを得ず

いかなぞ安然として 驚懼せざる

おのおの聞け 強健有力の時

自策自励して 常住を求めよ

『往生礼讃』は唐の善導大師の五部の著作の一つであつて、六時礼讃ともいわれる。それは一日二十四時間を日没、初夜、中夜、後夜、晨朝、日中の六時に等分して、それぞれの偈文を読み、阿弥陀仏を礼讃礼拝してわれわれがこれまでの知って犯した罪や知らずに犯した罪の一切を懺悔して清浄な浄土に往生を願う実践行儀、つまり尋常の勤行法がのべられてゐるのである。この六時にあてられた偈文は、全部が善導大師の作ではないけれども、なかなかの名文で文学作品としてもすぐれたものであつて、これを読誦する者もこれ聞く者も、共に身のひきしまる思いがして、真剣に読むならば一種の宗教的な境地へと入り得るものである。なぜなればこれは善導大師が、自らの思索と実践とを通して構成したものである。善導大師の時代にこの礼讃読誦に今日伝えられるようなふしがあつたかどうかは知らないが、法然上人の門下の中で声明にすぐれた住蓮、安楽等が建永元年(一二〇六)の頃東山鹿ヶ谷で六時礼讃の修行をした時には、たえなる曲調がつけられていたのである。法然上人の伝記である『四十八巻伝』によるとその当時の礼讃修行の様子が次のようにしるされている。

「をのをの哀嘆悲喜の音曲をなすさま、めずらしくたう

とかりければ、聴衆おほくあつまりて、発心する人もあまたきこえけり。」

その中に後鳥羽院の宮女松虫鈴虫の二人がおり住蓮安樂の許に走って剃髪したが、あとでそれを知った上皇の逆鱗にふれて住蓮、安樂は死罪になり、やがてこれが発端となって法然上人等が流罪となった建永の法難にまで発展したのである。今日鹿ヶ谷の法然院のあたりにたたずむと、東山の赤松の林を吹きぬける松風に、そぞろ礼讃の音曲がしのばれる思いがする。なお我国においてはじめて六時の礼讃が修行されたのは、建久三年（一一九二）秋に八坂の引導寺において、その年になくなられた御白河皇の菩提追善のために心阿が調声し、住蓮、安樂、見仏等が助音して五音七声によって行なわれた時のようである。その後元久元年（一二〇四）後白河法皇の十三回忌にも、三部經書写と六時礼讃を勤行して菩提追福をされている。浄土宗の年忌法要に同音で往生礼讃が勤修されるようになったのは後白河法皇の法要以後であるといわれる。今日浄土宗のお寺の法事で読まれる『三尊礼』は往生礼讃の中の日中礼讃の偈文からとったもので、その時五色の蓮華の花びらがまかれるのは御存知の通りである。

## 善導と法然

浄土宗では法然上人を宗祖とか元祖というのに対して、善導大師は高祖とよばれる。この御二人は浄土宗の二祖とよばれ教義の構成の上で大事な祖師であって、お寺の本堂にはたがい二体の木像がおまつりしてある。よくみると善導大師の木像は、下半身が金色で上半身が墨染という不思議な御姿である。これは法然上人がお会いした時の姿を形にしたものである。しかし御二人がお会いしたというのはどうもおかしい。なぜかというとな善導大師は七世紀に中国で浄土教を説かれた方であり、法然上人は十二世紀に日本で浄土宗を開かれた方であるから、時も処もへだたりがあるのである。しかし法然上人のどの伝記でも御二人は出会っているのである。それはどういうことかというとな、宗祖は夢の中で善導大師にお会いして、さまざまな教えを受けたというものである。これが有名な二祖対面である。信仰にはこのようなことが起るものなのであろう。まして選択集の中で善導大師を弥陀の化身といい、浄土開宗の動機を与えた觀經疏を古来まれなる書といわれた絶対帰依の心理には、姿なき姿をみ、声なき声を聞くことができたのであろう。

### 偈文について

この偈は「往生礼讃」の日没礼讃偈の終りの方にでてくる

もので、原文は漢文である。「諸衆よ」のはじめの見出しは唱導僧が一人で唱え、以下は一同でとなえることになっている。

この偈の大意は大經と坐禪三昧經の中からとったもので、三分して読むとわかり易い。はじめの三行は人間の「生命の無常」を示したものである。すなわち人はみな日日忙しくいろいろなつとめに追われている。生活に人間関係に技術に學問に。そして人の命が自然に過ぎ去っていつ死時がくるかを誰も知らない。それはちょうど風の中の灯がいつ消えてしまふのがわからないようなものである。わたくし自身かえりみると今日まで五十年、變転の多かつた月日を生きてきたが、実は五十年を死んできたのではないか。あと何年いのちの火がもえるのであろうか、わたしは知らない。ただ人と人の世のむなしさを感じる。

次の三行は無常な人間が、さらに苦海に迷いつづけてそこから出ることができないことをのべている。六道とは三界のことと地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天のことと迷い続ける世界というのである。流転とか輪廻はこの六道を生死することである。人はなぜこのような迷いの世界に、だましあいの世の中に泣き笑いしながら、あんかんとしているのであろう

か。愚かなるは人間である。

終りの二行は修道をすすめるところである。強健有力の時は盛年にして患のない時をいう。善導はのべる。人びとよ、よく聞きなさい。体も強く丈夫な時にこそ怠け心を起さずに、身も心も精進努力して涅槃寂靜の永遠の世界を求めなさい。常住とは大変いい言葉で、永遠の世界とか眞實の世界という意で、有限相對に對して無限絶對を意味するのであり、ここでは極樂淨土をさすのである。善導大師はこの礼讚の中で常住なる世界を無量壽國といっているし、他の著書にも安樂、無為涅槃界、安養、無為の樂などとよんでいるのは、西方淨土の本質をのべたものである。

現実世界のあらゆるものは、うつり変り一つとして常住なるものはない。このことを人は自覺しないから、永遠ならざるものを永遠と思い、執着してはならないものに執着して迷い苦しむのである。この世も人も無常なるものと自覺した時に、有限なればこそかえって人は何をしなければならぬかがはっきりとしてくるのである。自策自勵する者に常住を求める氣持がおこるのである。善導大師はこの日没無常偈を説き終って、この常住を求める人がいかなる願いをおこすべきかについてのべたのが次の『發願文』である。(つづく)



増田 任雄

(東京・江戸川区在住)

## 大師のおやま(下)

— 霊 峰・高野山 —

高野山は四季を通じて美しい。弘法大師空海は「三教指帰」という書物を「人と感ずる時んば筆を垂る」と書き出しているが、悲しい哉、文筆能力のない私には、高野山は美しいと思えても、残念ながらそれを思うように筆に垂れることができない。凡人の悲しさである。

作家の瀬戸内晴美さんが、冬の高野山を訪れてよかったと、或る雑誌に書かれていたが、確かに冬の高野山は、それも殊更に雪の高野山が静寂で、清浄である。私も且つては高野山で暮らしたが、今でもそう思う。大師の廟前、奥の院への参道を覆う千古の老杉に積った雪が、どさりと落ちる。その落雪の地に響く音で囲りの静寂さをはじめて教えられたのを今も覚えている。金剛峯寺、今の高野山では地理的に中

心にあたるが、その前にある正確な時間に打たれる六時の鐘の音が全山に限なく響き亘るのも、雪の高野山の静寂さを増すのである。私は雪の高野山が「静寂」なので好きである。私は、静寂ということが音によって覚まされることを知った。俳聖芭蕉は「しずけさや岩にしみいる蟬のこえ」と詠んだが、奥羽の地に蟬時雨を聞いた芭蕉の心境はどんなだったであろうか。

芭蕉といえば、奥の院への参道の中ほど、確しか左側であったと思うが、小高い所に「父母のしきりに恋し雉子の声」という芭蕉の句碑が建っている。千古の老杉の根本に苔むして立ち並ぶ無数の墓石の群れ、そこに聞えてくる雉子の声には、たしかに里心を覚えさせる寂しさが漂っている。奥の院

への参道、そこに立つ無数の墓石の群れ、そこには矢張り霊場高野山を象徴している何物かがある。無数に眠る大小さまざまな死者の霊碑、それを覆う老杉の暗さは、霊場の陰鬱な雰囲気をいやが上にもかもし出している。死霊の休息している場所、霊場高野山がある。きつと、そこでは、古い、古い、それはとても古い昔しの人の人生の喜びや、悲しみが語り合わされている愉快な、あるいは悲しい場所なのである。

雪の高野山にも静寂なよさと、自浄な美しさがある。そして、奥の院への参道にも幽暗い、妖怪しい懐古的ロマンの美しさ、それは霊場特有の雰囲気であるかもしれない。そして私はそれに美さえも感じるのである。雪の高野山にも、霊場としての高野山にも、そこにはともに或る種の美しさに高野山が象徴されている。

けれども、高野山には、右の二つの象徴とは全く別の、それが高野山の本来の象徴であると思える紺碧に澄んだ底知れぬ高い空に雄々しく聳立する根本大塔がある。そこが高野山の中心伽藍である。昔しは東門と西門に挟まれて、この根本大塔を中心に住房があったと言われているが、それは現在の伽藍にも充分に伺えるのである。そして、高野山のこの伽藍配置は、京都や、奈良の伽藍には全く見られない、それは高

野山独自の、つまり大経の思想を具現した密教独自の思想を表現したものであったのである。現在のその伽藍は、根本大塔を中心に大師の住房跡に御影堂が、そしてその前に講堂としての金堂が主に建ち並び、それらを諸伽藍が囲んでいるのであるが、御影堂の柔らかさに比して、金堂、大塔の重厚な姿は極めて対象的である。特に白壁を残して骨組みを朱色に塗った大塔は高野山を見事に象徴している。それは、とりもなおさず、密教の本體たる広大な宇宙の表現、曼荼羅の具現化なのである。この曼荼羅の具象的表現としての朱色に塗られた根本大塔が、高野山のもう一つの価値、澄んだ底知れぬ高い空にどっしりと重く建っている姿は、高野山の真価たる密教の本質を見事に表現している。虚子は、*「炎天の空うつくしや高野山」*と、高野の澄み切った空を詠んだが、ほんとうに高野山の空にこの大塔はよく映えるのである。特に秋の高野山の空は、他に喩えようのない青さである。高野の秋の空は澄んで、高い。その空に天を突いて立つ朱色の根本大塔こそ高野山の第一の象徴なのである。

朱色、それは赤である。赤は人間の力強い感情を表現する。が、それは毒にも、薬にもなる。赤は使い方で卑猥な不健康な色になる。だが、赤が見事に、巧みに使われたなら、

そこには何物をもはねのける力強さが表現される。パッシェン、人間の本源的生命の躍動する姿、あるいはそれを根源的に湧出させる力、生命力、密教芸術の赤は、そのようなことを表現している。わたしたちは、赤が見事に使われている例を、密教芸術に見ることができるとある。その一つの大きな例を、わたしたちは今高野山の根本大塔に見ているのである。

また、日本には、三不動と言われる赤、青、黄の各色に塗られた不動尊像が現存しているが、この三不動の一つ赤不動が、高野山には現存している。この赤不動も生命の力強い意吹きを感じさせる密教芸術の一つである。

このように、高野山には、赤に象徴される一面がある。それは本来の高野山が、密教の本旨たる曼荼羅の具現化された地、いや曼荼羅そのものであるという高祖弘法大師の開山の意に由来しているのである。

高野山を、どのような目で見ようと、それは高野山を見る人の自由である。冬の高野山もよし、あの陰鬱な霊場の高野山もよし、根本大塔に象徴される朱色の高野山もよい。何故なら、それが密教の説く曼荼羅の思想に適うからであり、個性をみつめている弘法大師空海の思想であるからである。

毎年かならず高野山を訪ずれる私は、今年も過ぐる五月の初旬に高野山を詣でた。そして金剛峯寺に参詣した。その折、静かな、色少い金剛峯寺の裏庭に咲いた薄紅いのピンクの杓楠華に目を奪われた。その杓楠華は華やかさの無い其処では、余りにもあでやかに咲いていたのである。尼僧に女性を感じる煩惱熾烈な私にはその杓楠華が、尼僧を置かない金剛峯寺の寺風に、一極わに華やかさを添えているように思えた。この時私は、大師自らが日記風に記録してた「性霊集」という書物の巻第一に記録されている「山に入る興」という個処の一文を思い浮べた。

「君見ずや、君見ずや。京城の御苑の桃李の紅なるを。灼灼芬々として顔色同じ。一びは雨に開け、一びは風に散じ。上に飄り下に飄て園中に落つ。春女群り来て一び手に折り、春の翬翔り集て啄んじて空に飛ぶ。云々」

大師が高野山に住されていた頃も、きっと五月になれば、杓楠華が見事に咲いたことであろう。弘法大師という人は、激しい気魄の一面に、繊細な感覚をもっていた人である。大師は、深山に咲く花華にも「……春の華、秋の菊、笑んで我に向う」と、微細な視線を向けられる人であった。

過日、高野山を参詣して感じたことを記した雑文である。



## 綾子の出家 (下)

吉野翠幹

(神奈川足柄下郡在住)

床の中に入った政吉は、ますます冴えて睡る気になれなかった。綾子はいま何を考えているのであろうか。政吉の頭の中は、理由の解明というよりは、綾子の一挙一投足を目の前にしているように夢想していた。

政吉は幅広い階段を下りて行った。階段は暗く、下から湿った空気が吹きあげてくるので、奈落に通ずる路のように陰気であった。地下三階なのか四階なのか、いきなり政吉の目の前にキャバレーがあった。正面のステージだけに照明が集まり、中央近いボックスに一組の客が打ち興じていた。客の真中にくっきりと大きく笑っている綾子の顔があった。

政吉の耳に、あれが店の売っ子で、大学生ホステスで

あると囁くものがあつた。すると一人の酔客がいきなり綾子の肩を抱きすくめて、一緒に座席に倒れかかった。政吉はたしかに座席の中から鋭い叫び声を聞いた。その悲鳴に政吉は思わず身体を震わせたが、それと同時に目が覚めた。

台所の方から妻が二人の幼児に食事を与えているらしい音がした。政吉は目が覚めても頭の奥が痛むので、いっになく床を離れようとしなくて、昨夜から少しも先きに進まない考えに耽っていた。綾子が今のように美しく健康に育ったというのも、大切な珠を磨上るように根気よく細心に育て、何一つ不自由な思いをさせなかったからである。素直に伸びきった綾子は、政吉にとって宝物

のように輝いてみえ、親の自慢の一つとなっていた。

このままいれば、近い内に必ずどのような幸福でも掴ませてやれると日々を楽しみに暮してきた。それが何が不満で急に家を出たいといいだしたのであるか。家の外で綾子を待っているものは何んであるか。

「綾子を家から出してはいけない。絶対にいけない。家を出る原因が何んであろうと、今はそれを問題にしている場合でない」

政吉は独言をいって、何かに弾かれたように床を離れた。

綾子としも同じように睡れぬままに朝を迎えた。昨夜遅くまで父と議論をしてしまった。父からいろいろと責められていた内に、あれ程自信を持っていた理由について、一つ一つがぐらつき出し、父の畳みかける質問について黙ってしまうことが多かった。それでも綾子は自分の決意をかえまいとして自分で自分を鞭打っていた。

綾子は自分でも我ままたなことで承知しながら父にねだったこともあった。それでも父はだまって願いを満たしてくれてきた。工場の職人が次第に減って父は困っていた。とくに事務を預ける人がなくて父の仕事が忙しく気

の毒になる位であった。綾子は自分が事務を手伝うようになれば、父が喜ぶことが判っていたながら大学進学を希望した時も、父は当然のことのようにすぐ許してくれた。

綾子は生みの母の面影が記憶の中に浮ばなかった。鏡の中に自分の顔を見詰めながら、母の顔を描き出そうとしても少しもまとまらなかった。古い写真を探してみても、母が撮れている写真が一枚もなかった。恐らく父が母のいる写真を処分してしまったからであろう。綾子が親戚や古い職人から聞き出した話によると母は自負の強い感情のはげしい人であつたらしい。その母が工場の職員、若くて気障な調子者に誘われて、遂に父を裏切ってしまった。その後母がどうしたのか、今どこにいるのか噂にものぼらなかつたし、誰も知らなかつた。

父は再婚し、二人の子供が生れたが、世間でいう継母、義兄弟といった対立がなかつたし、平凡な毎日が続いた。しかしかげでは父と義母との巧妙な配慮があったために相異なかつた。綾子は家では自分の部屋にいる時が多かつたし、義母は子供の世話にかまけていたので、感情のぶつかり合うこともなかつた。父と綾子と義母と

はいわば三角関係のような生活であったが、表面はあくまで平和な家庭であった。

綾子は大学に入った時に、ふくら雀のように夢を一杯につめ込んだ胸を張って歩いた。しかし大学には授業も研究もなかった。革新の理論は二次として、同じ世代の同じ場所の空気を呼吸しているという共感から、大学紛争に関心を持たざるを得なかった。同僚に誘われて、興味本位に集会に出席したのであったが、その場に参加したというだけで、一同から一人前に取扱われ、早速に一つの任務と責任を持たされてしまった。任務は駅前で散らしを配ることであり、責任というのは次の集会に同僚を更に誘って参加させるということであった。

さっそく計画に従って綾子は真赤なヘルメットをかぶって駅前に立った。ヘルメットは見掛けよりはるかに軽かったが、それを身につけただけで危機感が自然にわき出て、身体が引き締まるような使命感をおぼえた。忙しうに往来する人々の間にあって、自分だけが立っている、大地にしっかりと仁王立ちとなったようで、大仕事の一端を担っているという自負心を感じた。ビラ配りは走り使いのような簡単な仕事であったが、同士の一員とい

う満足感から、混雑する人々に一人一人話しかけてみたい感激をおぼえた。あれだけ流動する人々が皆自分を注視していて、横からも後ろからもやきつくような視線を感じた。

名前も知らないような友達が急にふえた。女子もいたが多くは男子であって、一緒に喫茶店に入ってよく喋った。またバーに入って気前よく酔うこともあった。わけもなく街を歩いていて、途中で友達になる相手もあった。毎夜のように繰り広げられる奔放な生活が、綾子にとってこの上ない魅力に富んだものに思えた。当然のことに綾子の帰宅の遅くなる日が続いた。

ある日、綾子はアクチブと自ら称する男から同棲を求められた。綾子はその男の素性を知らなかったし、特に同棲してみたい気持もなかったが、その男と毎夜のように会っているうちに、男の熱のこもった理論と、次の世代を建設しようとする誠意にうたれた。運動に挺身する者にとって同棲がいかに有効であるかを説いた。結婚というより同棲の方がほんとうの姿であるともいった。

男は綾子にますます積極的になって行った。綾子は男の態度に引きずり込まれてゆくものを感じていた。男は

## 新刊紹介

大正大学助教授 玉山成元著

### 普光觀智国師

——近世初期における浄土宗の発展——

△A5判二三〇頁上製 定価一八〇〇円▽

中世の浄土宗は、教義的にも教团的にも統一された宗団としては確立していなかった。これを何とか正統化しようという現われが室町時代の学問的風潮となり、聖岡が出て教義の大成をはかったが、各地に本末團が散在し、教団としての組織は不統一であった。その本末團を統制し、名実共に他宗と匹敵する浄土宗教団を作り上げ、今日ある浄土宗を基礎づけたのは觀智国師（源譽存応）である。著者は良質の史料を駆使して近世初期の浄土宗史を深り下げ、その流れの中で国師の生涯を浮きぼりしている。とくに表面的な履歴の羅列にあきたらず、人間的な性格の把握に心血をそそいだユニークな著作。近世仏教における実証的研究の先驅をなす必備の書。

発行所 白 帝 社

電話二六一—四三五六番

東京都千代田区神田神保町三の十三

いつの間にか下宿先きを決めてしまい、すでに契約までしききたと自慢げに話した。綾子はここまでくると、この男に自分を託し、共に革新運動に邁進することが自分の宿命であり、宿命に従うことが自分の宿命であり、宿命に従うことが自分の正しい道であるように思った。

そこで綾子は思い切って父に家を出ることを申し入れたわけであった。父は案の定に反対した。それより父の激しい怒りは綾子にとって予想外のものであった。生れて初めて父の強い叱責を受けたように思った。それだけ父の愛情の深さを今更のように知った思いであったが、その反対に父に反抗してもここまでできた自分の氣持を裏切るわけにゆかないとも思った。

綾子は重い頭を抱えて机に向っていた。階下の応接間からは取引客の笑い声が、思い出したように聞えてきた。綾子は客がなるべく帰らないことを願った。いつものように今日も父が客を料亭に案内してくればよいと思った。綾子はどうしても父に従って世間の道に進むべきか、男と一緒に運動にはしるべきかどうしても判断がつかなかった。

(終)

## 開宗八百年記念のため

### 鑽仰会員倍增運動趣意書（試案）

1 念仏修行上、定まった指導・相談所を持たない無数の在家信者のために、各寺院に鑽仰会へ加入していただくための趣意書を配布し、御協力を仰ぐ。

2 昭和五十年までに会員一万人達成を目標とする。

3 賛成寺院は毎月一二回講話集会（仮称）を開催し、法然上人の教えを現代に実践し、遺徳を鑽仰することについて判りやすく解説し、参加者に対し鑽仰会への加入を要請する。

4 法然上人鑽仰会の存在趣旨を、まだ知らない人も多い故、あらゆる方法をこうじて宣伝に努める。

5 在家信者は宗教に関し疑惑を生じた時

は、随時所属する寺院に説明を求められるようにする。日刊紙の宗教欄なども利用し、各指定寺院における毎月の講話集会に自由に参加していただくよう宣伝する。指定各寺院は門前の見やすい場所へ、法然上人鑽仰会の名で、その月の講話集会日を掲示する。

6 講話集会には、会員は勿論、お互いさそい合って一人でも多くの人が参加するよう呼びかける。

7 講話集会は意義あるものとし、参加者に常に親しまれるものとするよう研究する。

8 講話の内容には、必ず三心・四修を含め、不退転の念仏修行ができるよう指導する。

9 講師が質問を受け、その説明をする場合には、浄土宗教義に関してはその寺院も同

一でなければならない。

10 指定各寺院は鑽仰会加入者の名簿を作り、本部に連絡する。

11 本部にては名簿を完備し、会費は原則として一ケ年一千円を前払いとし、分割希望者は半年分五百円を前払いとする。特別会員をなるべく多くつくるようにする。

12 この試案は東京において開始し、漸次各地方に及ぼす。（東京大田区・秋元朝雄）  
以上は在家読者よりの提言であります。昨年より始めた、在家読者を中心とする講話の会に、より多くの方々の参加を求めるための提案と受けとり、大方の御意見をお寄せいただきたく存じます。

書くこと、いうことは誠に簡単ですが、今日のような世情の中で、人びとが一堂に会し心をかよい合せることは、仲々至難のわざであります。共に法然上人を鑽仰いたすという立場にたって、より大きな努力をほらいたいと思います。多数の御意見をお寄せ下さい。その結果により、この提言を生じたいと思っております。

—編集部—

# 京都への道

高橋良和

道

◇ ◇ ◇ ◇  
春のくれ方のことである。

奈良から京都への道、奈良街道を足早にいそぐ墨染の衣をまとった一人の僧侶があった。そのころ奈良東大寺大仏殿の薨はもう入り日にくっきりと黒い影をおとしているし、興福寺の五重の塔などは、その九輪に残照がちかちかしているような風情であった。

その僧の足は、槃若寺のわきの坂を通過して、京都との境の木津の里に近いところまで伸びていた。

「この分だと、京につくのは日がとっぷりくれてからになるな。」と、ひとりごとのようにいいながら、足は更に早くなった。

さいわいに、坂はくだり坂になってきたようである。するととつぜん、うしろの方から声がしてきた。

「あすこに行かれる僧がきつとそうであろう。」

「みんなもう少し速く歩こう。」

などといいながら、あとを追ってくるのは、さきの僧とちがって、衣を肩までまくしあげ、頭に僧兵の頭布をかぶった、奈良東大寺の僧兵たちであった。

「その坊、しばらくお待ちくだされ。」

足ばやに迫ってきて、声をかけたのである。

すると、さっきの僧は、足をとめた。

「なにか忘れものでもいたしましたかな。」

「いや、忘れものではございません、実はあなたに、ただしいことがございまして、

東大寺から追っかけてきたのでございます。」

あわてた僧兵たちは、この僧がたちどまった横に立って、はなしかけたのである。

「それはいかようなことでございますか。」

その僧のことばは、おちついていった。

「実は今日東大寺大仏殿の大仏開眼供養の法要にあたりまして、あなたが導師をつとめられた際に、ただ念仏だけを申されて退堂されましたにつきまして、あのような大法要なら、もっと長いお経をとなえてのおつとめがあつてもよいもの、いかなる理由なのかお教えねがいたいと存じます。」

「ほんとうに念仏の功德があるのかどうか。」

僧兵たちのことばは、だんだん語気が強くなってきた。

◇ ◇ ◇

「なるほど、それは不思議に思われるのも当然のこと、念仏の功德はいかに大きいか、そちの目の前でみせてあげよう。」

その僧はそういいながら、とある百姓家に入っていったかと思うと、その家から一本の天秤棒と、その外に土持ちをするモッコを二つ借りてきたのである。

「なにをなさいますか。」

僧兵たちは、この僧のしわざに小首をかしげながら見守っていたが、

「さあ、これをおつかいでくだされ、そしてこのモッコの一方にそこにある石をのせてください。」

いわれるままに、道端にあった何百キロもある石を、モッコのなかにのせたのである。





すると、この僧は、腰から矢立をとり出し、懷中から一枚の紙をとり、その紙になむあみだ仏と、名号を墨で書いたかと思うと、それをそーっと、もう一つのモッコの上にのせたのである。



そのときである。

なんという不思議なことであろうか。何百キロという石がするすると上にあがったかと思うと、一枚の「なむあみだ仏」と書いた紙ぎれが、石よりも重く下にさがったのである。

「ごらんの通り、なむあみだ仏の功德はこのように、石より重いものでございます。」その僧は、このようにいって、今かついでいる僧兵の一人から、モッコを下におろさせたのであった。

追っかけてきた僧兵たちも、思わずこの僧のおしえの深さに頭をさげたのである。

この僧はだれであろう。

法然上人であったのである。

この石は京都府木津の里に、今も念仏石として残って、ここを通る人々に今もなお念仏の功德をおしえているようである。

おそらく話は、或は伝説で、史実にあるわけでもないと思うが、念仏が往生極楽のための唯一のてだてであることを知らしめた、なによりのはなしである。

京都から奈良への道は、今すばらしく便利になっているが、今もなおその道に残る念仏石には、このはなしをつたえている。

ゆかしいことである。

# 伺 御 中 暑

大阪市天王寺区上之宮町二六の二  
上宮 学園  
学園長 小林 大巖

家政学園  
京都家政短期大学  
学長 三枝樹正道

東山学園長  
藤原 弘道

華頂学園長  
水野 隆樹

熊本市九品寺三丁目一ノ一  
鎮西学園長

上田 貞雄

神奈川県葉山町堀内五六八  
相福寺  
明照幼稚園

杉田 義俊

静岡県富士宮市東町三一二八

大頂寺 石井 真峯

〒418 電話(〇五四四二)六一三四六五番

兵庫県明石市鍛冶屋町五六  
光明寺

山口 諦存

法然上人ご流謫遺跡  
二十五霊場第二番  
仏生山法然寺

細井 照道

長崎市 大音寺

本原 義岳

真仏教舎教団本部会長

裏辻 賢洲

福岡市外福岡町松原山大善寺住職

静岡市日吉町二番地の二

華陽院

住職 堀田 良謙

電話(五二) 三六七三番

だん王法林寺

信ヶ原 良文

京都・三条大橋東詰

# 伺 御 中 暑

稲岡 覚 順

川口市北町二一五〇

西福寺

浄土宗議会議長

戸川 靈 俊

京都市左京区黒谷町西住院

大阪工業大学・東大阪短期大学

浄土宗保護司会理事長

栗本 俊 道

浄土宗議會議員

蓮勝寺住職

柴田 敏 夫

横浜市港北区菊名町

弘前市新寺町 貞昌寺

宗會議員

赤平 昌 導

鎮西流根元地 聖光寺住職

小林 忍 戒

京都市下京区寺町仏光寺上ル

近竜寺住職

松濤 弘 道

栃木市万町二二一四

電話(〇二八二)二一〇八〇二番

函館称名寺

住職 武藤 善 友

執事 須藤 隆 仙

白幡 憲 佑

横浜市南区夷台久保山

光明寺住職

飯田 信 弘

四日市市中部三

光運寺

真野 龍 海

現代人の心をとらえる念仏の説き方に努力しております

布教師 小布施弘学

長野市松代町東寺尾

長明寺

法衣・仏具

株式会社 安 藤

本社 京都市東山区古門前東山

線西入

電話 〇七五 五六一一〇六九〇  
五六一一二四〇二

東京店 東京都港区芝西久保巴町

電話 一〇六 〇三一四三一〇四二八

法然上人鑽仰会

## 宝物シリーズ

奉寄進明眼寺田地之事

合田二友者在所大岡奥田

右志之趣者為「道欽妙超兩」人ニ也、毎月於ニ彼当日ニ可レ預ニ御廻レ向ニ者也、仍寄進之証如レ件

永正四年丁卯二月廿八日 勝長（花押）

明眼寺殿乃いる

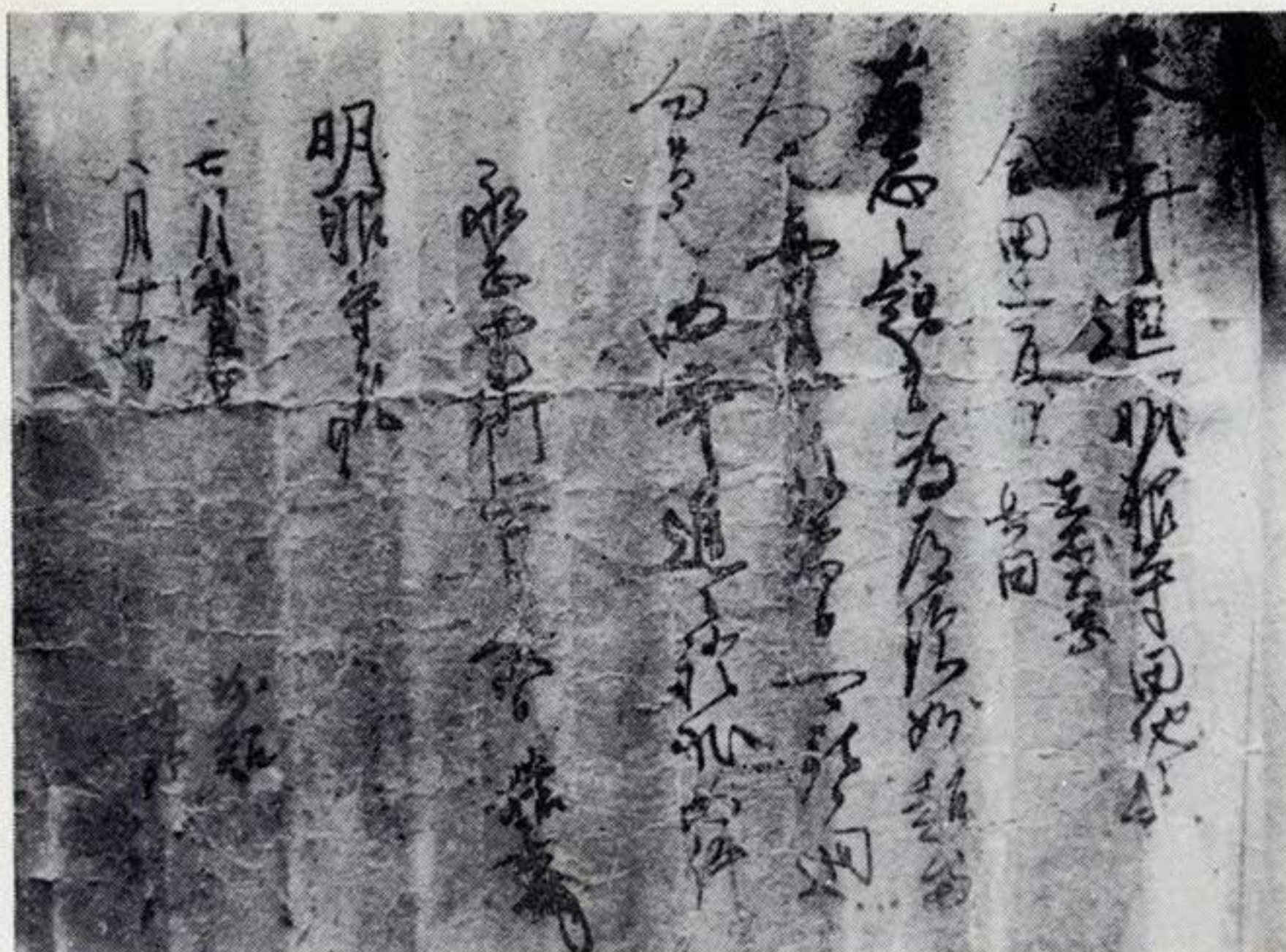
七月十三日 妙超

八月十九日 道欽

三河に妙源寺という真宗の寺院がある。満性寺などと並んでその中世末期における勢力はすばらしいものであった。どうも太子信仰（聖徳太子）がもとで妙源寺（古くは明眼寺）ができたようだ。同寺には約百点程の所蔵文書があり、寺院発展史、土地制度などの良質の史料となっている。代表的なものは、永禄八、九年（一五六五・一五六六）頃と思われる三月廿二日付の家康の書状である。それは家康の廿四、五歳のころのもので、家康が持仏堂に安置するために恵心の阿弥陀仏を申し請けたい旨の内容であり、若き日の家康の信仰の一面をよくあらわしている。けれどここで紹介する寄進状はそ

の様な有名なものではない、永正四年（一五〇七）二月廿八日に勝長が明眼寺に田二反を寄進する。それは大岡具田である。その志は道欽と妙超のためだとし、毎月の歿日の廻向をして欲しい、そのために寄進するものだという内容のものである。別筆で妙超が七月十三日、道欽が八月十九日歿した旨を記している。けれど勝長と妙超道欽がどういう関係かはつきりしないが、縁故深いことには相異なる。多分両親である。両親のため、自分の後生のためとしたものである。けれど、こうしたことがうたい文句になっている文書もあるけれど、この文書などは純粋な気持といって過言でない。永正四年という北陸では一向一揆、京都近辺では細川澄之が香西・薬師子などと謀って、その父である政元を殺している。ところが八月に彼は細川高因に殺されてしまった。いわゆる下剋上の時代であり、戦国期へと変わるのである。

子供が親を殺す時代であっても両親のために二反の田地を寺に廻向のために寄進する名もない在地の人もいたわけである。下剋上の時代であるから全部が全部そうであったとすることははいけない。乱世であればある程こうした気持は強かったのに相異なる。平和な時代の盆供養にこそ心のかよった純粋な、親子の語りあいが必要ではなからうか。（田中祥雄）



## ——中世末期の寄進状——

——愛知県・浄土真宗妙源寺蔵——

|                 |                  |                                |               |                                                                              |                                                          |                                                                                                                         |
|-----------------|------------------|--------------------------------|---------------|------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>「浄土」購読規定</p> | <p>一部 定価 九十円</p> | <p>会費一力年金一、〇〇〇円<br/>(送料不要)</p> | <p>浄土 八月号</p> | <p>昭和十年五月二十日<br/>第三種郵便物認可<br/>昭和四十五年七月二十五日印刷<br/>昭和四十五年八月一日発行<br/>定価 九十円</p> | <p>編集人 宮林昭彦<br/>発行人 佐藤密雄<br/>印刷人 関二三男<br/>印刷所 三幸社印刷所</p> | <p>東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六<br/>発行人 法然上人鑽仰会<br/>電話東京二六二局五九四四番<br/>振替東京八二一八七番<br/>東京都港区芝公園十九号地の一<br/>浄土宗務支所内<br/>編集室 法然上人鑽仰会</p> |
|-----------------|------------------|--------------------------------|---------------|------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

# 伺 御 中 暑

総本山 知恩院

門主 岸 信宏

執事長 鵜飼隆玄

浄土宗宗務庁

浄土宗宗務支所

大本山 増上寺

法主 椎尾弁匡

執事長 里見達雄

大本山 光明寺

法主 大野法道

執事長 吉川哲雄  
鎌倉市材木座六一一七―一九

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

副住職 鷹司誓玉  
執事 北川恵作

東京心光院

戸松学瑛

港区南青山二丁目二六の三九  
梅窓院

中島真孝

中島真哉

里見達雄

大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

東京都文京区小石川三丁目十四―六

伝通院住職

大河内隆弘

祐天寺住職

巖谷勝雄

東京都目黒区中目黒五一―二四―五三  
電話(七一二)〇八一九 一五三

東京都大田区田園調布

照善寺

田丸徳成